

私の一冊

看護学科 稲勝理恵 先生

西村ユミ著 「交流をかたちづくるもの - 日常性の裂け目から」
(『講座生命 6』所収)

小鹿図書館 : 104/Ko 98/6 (河合文化教育研究所)

実習中の看護学生から、こんな言葉が聞かれることは度々ある。「受持ち患者さんの反応が、よく分からない。」と。彼女たちが受持っている患者は、意識障害という状態、つまり「周囲への注意が鈍り、認知や理解が不正確となり、反応が鈍いもしくは出来なくなった状態」にある。このような患者に対して、彼女たちは何らかの声かけをし、その反応を確認しようとするものの「よく分からない」というのだ。

しかし、このような場面にでくわした経験は、看護学生だけに限ったことではなく私自身にもある。「おはようございます。〇〇させてくださいね。よろしいですか？」と、患者にむかって声をかけてみたものの、患者の反応や意思が分からず、一方通行の声かけになってしまったことも少なくはない。そして、なんだかすっきりしない気分になる。虚しささえ感じることもある。

『交流をかたちづくるもの 日常性の裂け目から』では、筆者は看護婦 Bさんと遷延性植物状態と診断されている岡野さんとの交流に注目し、Bさんの語りからその営みを紐解いている。Bさんは勤務を終えてからしばらくの間、受持ち患者である岡野さんと話をするのを習慣にしていた。岡野さんの傍らで、彼女は楽しそうに話し続けていた。

看護婦 Bさんと岡野さんとの交流に触れ、私は、患者と関わる自分自身の態度・見方を問い直しはじめた。私が行っていた声かけとは？

是非、みなさんにも、Bさんと岡野さんとの交流に触れていただきたい。そのとき、患者と関わる世界が少しずつ変化し始めると、私は思う。